

郷土文学資料センター だより

第6号 2005年 11月 4日

河上徹太郎の評論の視点

稲生 慧

(当センター運営協議会委員)

河上徹太郎は没するまでの78年間に膨大な評論を残している。文学や音楽、文化評論、訳詩も名作がある。全部目を通してはいるわけではないが、評論には大きな視点があると思う。

幼少期から母ワカの導きでキリスト教会に通い、成人するに及んで小林秀雄などの一流の評論家や、文学者と出会う。さらに、西洋思想と対峙することによって文章に磨きがかかっていく。西洋思想、合理主義、キリスト教を尺度として評論を展開したと考えている。その視点は日本にはない新鮮で卓抜した評論を生み出した。

河上氏は郷里岩国の図書館のよき理解者であり協力者であった。岩国図書館の開講する市民大学講座には幾度となく出講してくれ、興味深い講義をしてくれたものだ。

講義が終わると図書館の宿直室にて旧知と酒盛りが始まるのだが、訥弁な彼は俄然雄弁家に変身する。時の図書館長は若い私を「文学に興味を持つ男だから・・・」と紹介してくれたが、文学については語らず、「獵」「ヨット」「いかもの」の話題が中心だった。しかし、自作を出版するとサインをして贈ってくれるという心遣いをする人であった。私に贈られたサイン本は『日本のアウトサイダー』『日本のエリート』『有愁日記』『近代史幻想』そして、『吉田松陰一武と儒による人間像一』である。これを読めば私の考えはわかるはずだといったげであった。

評論した人物を『日本のアウトサイダー』から拾ってみると、河上肇、岡倉天心、内村鑑三、大杉栄、太宰治、小林秀雄などをあげて評論している。何らかの形でキリスト教や西洋思想にふれているか、考え方に類似点をみる人たちはばかりであることに気付かされる。

晩年に書いた『吉田松陰』では「松陰の考え方はヨーロッパ的、キリスト教的考えに近い」と語っている。

39歳のとき、婦人公論に、後に代表作のひとつとなった「新聖書講義」を書いた。キリスト教をよく理解する評論家として評判を獲った。

キリスト教の導き手ワカさんが天に召された日、徹太郎氏は急遽帰岩し、母の前で一人飲み明かした。ワカさんは岩国教会に出席していたので牧師が訪れ、「葬儀は教会で」と申し入れた。

私は玄関に正座していた徹太郎氏の1メートル後ろに坐っていたが、体をユラユラさせて牧師を応対していた。牧師は「新聖書講義」を持ち出して「こんなにキリスト教のことを理解しておられるのですからお母さんの葬儀は教会でいたしましょう」とたたみかけた。氏は「キリスト教が人間的教えであることは認めますが、死の問題は、私は日本の習慣に従います」という呂律の回らない答えであった。

理想は追い求めるが、現実は違うといったげな自由人であった。

ツルの俳人・亶理寒太の人生

田村 悌夫

(当センター協力員)

俳句を通じて誰とでも親しみ、生涯を楽しく生きた俳人がいる。「ツルの俳人」と言われる亶理寒太である。今般、彼の句集『群鶴』、晩年の手作りの句集『二つの病中吟』及び短冊三枚と日記等の資料が、郷土文学関係蔵書とともに寄贈された。いずれも寒太研究に欠かせないものである。

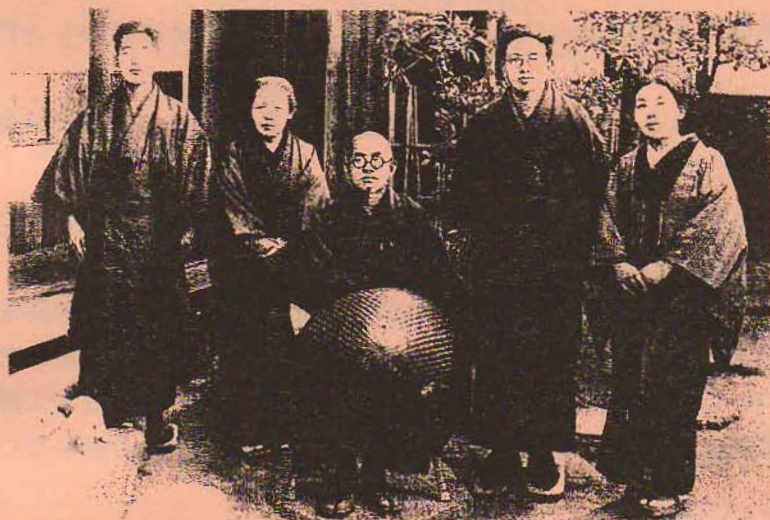
亶理寒太は明治28年12月5日、熊毛郡八代村(現周南市)に生まれた。八代村は本州唯一の鶴の飛来地で、彼が生まれる当時は約40羽程度の鶴が越冬していて、情緒豊かな地域であった。旧制徳山中学在学中は寄宿舎大成寮で過ごす、同郡出身者だけで「皇城会」が組織されていて、二年先輩に高水の斎藤清衛(俳号・伎世衛、大学教授、俳人)、二年後輩に三丘の有馬草々子(本名・貢、町長、俳人)がいて共に谷崎潤一郎や鈴木三重吉らの小説やドストエフスキーの翻訳ものに興味をもつ。中学時代から文学に目覚めた寒太は、短歌を『アララギ』誌に、小説や戯曲を雑誌『文章世界』や『秀才文壇』に投稿、入選していた。また白揚社の短歌回覧誌『四十女の戀』の同人にもなり、この中に種田山頭火や久保白船ら後に自由律俳句『層雲』のメンバーとなる者達があった。

三高在学中に作家を志し、佐治祐吉、中戸川吉二、村松正俊らの第五次『新思潮』の同人として小説や詩を書く。大学は文学部を志望するも、許嫁静子の父親から「文科に入るような男には娘はやれぬ」と言われ、詮方なく京都大学経済学部に入るが、大学院では文学を専攻する。

昭和6年、尾道中学教師時代に荻原井泉水の『層雲』に投句、昭和8年、放浪中の山頭火を尾道に迎え四晩にわたり句会を開き彼を歓喜させた。その後句作を停止後昭和16年、松野自得の「さいかち」に定型俳人として再出発。戦後、吉田高等女学校長から郷里の新制八代中学校長として迎えられ、村に文化の灯をと群鶴句会を主宰し、八代の鶴を全国に発信し、多く俳人を迎えた。

「ツルの俳人」として愛された寒太は、俳句を人温と風光の文学としてとらえ、新古を超えた美しさを鶴に求め表現した。また八代音頭を作詞し、花笠踊の保存等古里の文化向上に尽力した。

万葉の鶴翔け山河年迎ふ 寒太 (寄贈短冊句)



写真：昭和8年9月、山頭火を尾道に迎えた寒太。向かって右より妻静子・寒太・山頭火・母フジほか。 俳人・亶理寒太

(*上掲写真2葉は所蔵者田村悌夫氏から貸与されたもの。氏のご好意により複写し掲載した。一編集者)

太田静一氏宛 井伏鱒二書簡について

加藤 禎行

(当センター研究員)

故太田静一氏から郷土文学資料センターに寄贈された資料から、井伏鱒二書簡二通を紹介する。

太田静一氏は、本学の前身、山口女子短期大学の教員を勤めながら、『嘉村礒多人と作品』（彌生書房、1957〈昭和32〉年11月30日発行）、『嘉村礒多 その生涯と文学』（彌生書房、1971〈昭和46〉年4月30日発行）という二冊の嘉村礒多研究書を上梓している。今回紹介する書簡は、それぞれその献本に対する返礼だが、井伏鱒二の嘉村礒多観が窺える興味深い資料である。以前、資料紹介を行ったものに、川端康成による献本返礼の書簡があるが、川端康成・井伏鱒二・嘉村礒多はいずれも新潮社「新興芸術派叢書」から単行本を刊行した新興芸術派の作家であり、太田静一氏から見ると〈兄〉の世代に当たる作家達であった。

太田静一宛井伏鱒二書簡（一）、1957〈昭和32〉年12月10日消印

「拝復／御本を拝見しました。礒多対善蔵の／御説には賛成です。これは嘉村さんを／研究する若い人に対して良い贈物だと思ひ／ます。善蔵の作品にしても兎に角、と嘉村／さんは心のなかで思つてみたこととせう。「文科」／「作品」対礒多。これは交遊の上では全然関係が／ありませんでした。嘉村さんに手紙を出して原稿を／送つてもらつたにすぎません。僕も嘉村さんの友人で／はありませんでした。本当はこれから、といふときに亡くなつたので惜しいことでした。」

葉書表 山口市宇部山口女子短大内 太田静一様
東京杉並清水町二四 井伏鱒二

井伏が「善蔵の作品にしても兎に角、」と述べるのは、宇野浩二『文学の眺望』における証言を引用し、葛西善蔵が口述筆記で礒多が書き上げた原稿を破り捨てたエピソードについてのコメントか（太田静一『嘉村礒多 人と作品』p124）。また同人雑誌の、「文科」「作品」対礒多の関係について証言しているのは、「そしてこの頃からの礒多の交際が従来の新潮系譜作家——不同調・近代生活グループの範囲を越え、「文科」「作品」に拠る牧野信一・三好達治・井伏鱒二・河上徹太郎・今日出海といつた人達と相わたるに至つたのは大いに注目されねばなるまい。事実、全集所載書翰を見ても昭和七年を境として急にこれらの人々へのそれと代るのも興味深いことである。」（同書pp142-143）という記述があることによる。

太田静一宛井伏鱒二書簡（二）、1971〈昭和46〉年5月11日消印

「拝復／昨日広島から帰つて来て、さつそく御本を拝見しました。出るべくして出た書物だと思ひました。今後嘉村さん研究をする人のためになるものだと思ひます。文中、一流作家でないとありましたが、私としては嘉村氏の文学は第一級のものだと思ひます

ただ世間的に一流作家でないと見られてゐただけではないでせうか。第一級の作家を書くためには世間的には第三流作家である方が結局好都合なのではないでせうか。嘉村さんが中村武羅夫さんに対して卑屈な態度をとつてゐたと見る向きもありましたが、あれは嘉村さんが故郷の父親に対して手紙も書いてゐる態度と似てゐたのではないでせうか／御本を読みながら、つくづく惜しい作家だった【と】思ふ気持を新たにしました。再拜／五月十一日 井伏鱒二／太田静一様

封筒表 753 山口市中後河原一八三 太田静一様

封筒裏 東京都杉並区清水一ノ七ノ一 井伏鱒二（印刷）

井伏鱒二と広島との関わりで、自然と思ひ起こされるのが、小説『黒い雨』（1966〈昭和41〉年9月、新潮社）である。なお雑誌連載時は「姪の結婚」という題名で、1965〈昭和40〉年1月から翌年10月まで雑誌『新潮』に掲載された。「文中、一流作家でないとありましたが」と井伏が述べるのは、「嘉村は決して一流作家ではなかったにせよ、自らを証しとして人間の原罪を剔抉するときその特異な作風は現代においてもなお文学的意義を喪っていない。」という「あとがき」（『嘉村磯多 その生涯と文学』彌生書房、1971〈昭和46〉年4月30日発行）の一節を踏まえたもの。なお、『嘉村磯多 その生涯と文学』は、前著『嘉村磯多 人と作品』を増補改訂したものだが、1957〈昭和32〉年の井伏鱒二の指摘は、反映させていない模様である。

寄贈資料 -2005年4月～2005年11月-

安藤敦子『おカル同行抄伝』

守田保『防長郷土修身資料第二輯』

森重香代子『二生』

田中克子『人生ピエロ』

井上剣花坊顕彰会『井上剣花坊句集』

歴史の町山口を甦らせる会『山口市菜香亭開館記念図録』

山本寛嗣『山根二郎遺歌集「やまなみ」雑感』

大佛文乃『大佛文乃全詩集』

吉武美智子『絹さやのある風景』

吉武美智子『秋桜』

編集後記 ▲センターだより第6号をお届けします。▲今回は、稲生慧先生の「河上徹太郎」、田村梯夫先生の「亘理寒太」に就いての玉稿を掲載しました。両先生に感謝申し上げます。▲当センターの加藤禎行研究員には太田静一氏宛井伏鱒二書簡の解説・紹介をお願いしました。▲ご意見・お気付き等ございましたらお寄せ下さい。(T)

■編集発行：山口県立大学附属郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜島3-2-1）

TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251

■発行日：2005（平成17）年 11月 4日